

はじめに

一九八一年（昭和五六年）に設立された国立歴史民俗博物館は、歴史学（文献史学）、考古学、民俗学など関連する諸科学の協業によって新しい日本歴史学の樹立をめざすとともに、そうした研究の基礎の上に展示や資料収集などの博物館活動を行うことを目的とする大学共同利用機関である。そのため創立当初から、常設展示開設の準備と並行して、全国の研究者に参加願って「都市における生活空間の史的研究」や「日本における基層信仰の研究」などをテーマとする共同研究を開始した。さらにやや遅れて発掘調査を含むフィールドワークを重視した特定研究として「日本歴史における地域性」の研究をもスタートさせた。こうした共同研究・特定研究はいずれも館外の研究者とともに、歴史学、考古学、民俗学など歴史関係の諸科学の共同作業によって、日本歴史の研究に新しい地平を切り開くことをめざしたものであった。ただこうした基礎的方法論を異にする諸学の共同研究の推進は、実際にはなかなか難しく、共同研究の具体的な方法の模索やその琢磨が、当面する大きな課題として提起されていた。

そうしたなかで一九八三（昭和五八）年、国立歴史民俗博物館は株式会社小学館より多額の奨学寄付金を頂くことができた。この寄付金は、館の研究活動に使用すること以外何の条件も付かないありがたいもので

あった。館内での協議の結果、この寄付金をもとに日本の農耕文化の特性の解明をテーマに、館内の研究者が共同で歴史学、考古学、民俗学その他関連する諸学の共同研究の推進を具体的、かつ実験的に模索することとし、館内の各分野の研究者よりなる農耕文化研究会（代表虎尾俊哉教授）を組織した。このテーマは、こうした関連諸学の共同研究の方法的模索を目標とするとともに、この共同研究の強力な推進者であった故坪井洋文教授による日本列島の農耕文化の多様性についての問題提起を受け止めたものでもあった。

この館内の共同研究活動は、主として一九八三年度から一九八五年度の3年間にわたり、集中的に研究会や現地調査などを実施し、その後も現在に至るまで研究活動は継続している。研究代表者の虎尾俊哉教授は当初から研究報告の刊行を意図されていたが、研究会の中心的メンバーの坪井教授の逝去や研究代表者の退官などもあり、また特に報告書の刊行などが義務づけられていなかったこともあって、成果の取り纏めが延びのびになっていった。しかし、多額の奨学寄付金を寄せられた小学館のご好意に報いるためにも何らかの成果の取り纏めを行なうべきであるとの意見が現在も館内に残る共同研究メンバーから起り、この報告を取り纏めることとなったものである。

こうした趣旨にもとづき本報告には、取合えず昨年の三月末日までにメンバーから寄せられた報告論文を収録した。またその後寄せられた報告論文については、続いて来年度刊行予定の国立歴史民俗博物館研究報告第七〇集に掲載する予定である。

このように本報告は、当初から体系的な報告書の作成を計画的に進めたものではない。したがってまとまりのある形の整ったものにならなかったことについては、ご寛恕いただくほかない。ここに報告されたもの以外にもこの共同研究によって得られた成果をすでに何らかの形で発表しておられる方も少なくないと思われる。また歴史学、考古学、民俗学、その他関連諸学の共同研究の経験の蓄積や方法的模索を実際に進めることができたという意味で、当時の国立歴史民俗博物館の研究者がこの研究で得たものはきわめて大きいと思われる。本報告が、当初意図した日本の農耕文化の多様性の解明にいささかなりとも役立つことを願うとともに、改めて小学館のご好意に対して厚くお礼申しあげたい。

(文責 白石太郎)

〔農耕文化研究会メンバー一覽〕

虎尾俊哉(研究代表者)、坪井洋文(故人)、田中稔(故人)、塚本 學、岩井宏實、山折哲雄、岡田茂弘、白石太郎、福田アジオ、今谷 明、阿部義平、春成秀爾、宇田川武久、平川 南、上野和男、山本光正、高桑 守、水藤 真、八重樫純樹、杉山晋作、西本豊弘、松崎憲三、湯浅 隆